

ご挨拶

コミュニティの回復に必要なこと

公益社団法人 宮城県精神保健福祉協会
みやぎ心のケアセンター
センター長 福地 成
(東北医科薬科大学病院 病院准教授)

東日本大震災から11年が経過し、私たちみやぎ心のケアセンター（以下、当センター）が設立してから同じ年月が過ぎました。これまでの間、当センターの活動を見守り、ご支援いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

傷ついた個人を支えるのと同時に、深刻な打撃を受けたコミュニティの再生を下支えすることも当センターのミッションと考えてきました。悲しいことですが、2011年の震災以降も世界ではトラウマとなり得る出来事が発生しています。こうしたなかで、私たちとは異なるコミュニティの回復過程から、生き物としての「ヒト」の特性について考えることがあります。

一つ目は「集まる」という特性です。たぶん、「ヒト」に限らず、全ての生き物に備わっている本能といえるでしょう。危機を乗り越えるために、本能的に凝集をするのだと思います。団体スポーツの前に円陣を組むこと、寒いときに肌を寄せ合うのもその一つかもしれません。震災の後には、さまざまなサロンが自然に発生し、運営されるようになり、いまでも細々と活動している団体があります。

二つ目は「作業」をする特性。集まったときに、つらかった体験や弱音を「話す」ことができればいいのですが、どうやら「話す」にはさまざまな準備が必要なようです。自らの自律性を取り戻すために、話す代わりになにかを黙々と作るのです。震災の後には、編み物やぬいぐるみ、家具などの木工を作成する光景がみられました。先日、他国へ難を逃れたウクライナの人々が、黙々と青と黄色で彩られたキルトを作成している光景を見る機会がありました。

三つ目は「文化」が回復の軸になるということ。「文化」とはいわばコミュニティのアイデンティティです。「これが私たちだ」ということを再認識し、集団として回復するための足掛かりにするのです。前述した「集まり」や「作業」のなかに、コミュニティ特有の「文化」が垣間見えることもあります。ウクライナの人々にとって、青と黄色は国旗に刻まれたシンボルカラーです。ここで一歩立ち止まり、私たちのことに思いを馳せます。はて、私たちが大切にしている「文化」とは何なのでしょう。

出勤前の寝ぐせと同様、身体の一部になってしまっているものに自分たちで気づくためには努力と工夫が必要です。私たちは、未曾有の大災害からどのように回復してきているのかきちんと振り返る時期にきています。このようなコミュニティ回復のプロセスを振り返り、取りまとめ、後世に残していくことも当センターのミッションと考えております。まだまだ道半ばです。引き続き、皆様からのご指導・ご鞭撻を頂ければ幸いです。